

学生記者の

# 多摩ぶらり散歩 4

## 青梅

中央大学の周辺には、さまざまな史跡をはじめ、豊かな自然やお楽しみスポットが数多くある。でも、意外と気づいていなかったり、知っていてもなかなか行くチャンスがなくて、いつも素通りという人が多いのではないだろうか。そこで学生記者がお薦めスポットを紹介する。題して『学生記者の多摩ぶらり散歩』。はたして、何やら新発見がありますでしょうか！。

### レトロな昭和にタイムスリップ

#### 駅歌は『ひみつのアッコちゃん』

何やらおもしろい街があるらしい。聞くとところによると、「行けば昭和時代にタイムスリップが

できる」とか。そこで午前中で授業を終え、時間ができた記者は、昭和レトロの街・青梅を訪れることにした。

中央大学からモノレールで上北台方面に約20分、立川南駅で下車し、JR立川駅から青梅線に乗り換えて30分。青梅駅には中央大学からは

ちょうど1時間で着いた。

駅改札では「パパ」がお出迎え待と少しばかりの不安が入り交じった思いを抱きながらホームに一步降り立つと、昭和の趣きのある様子が目に飛び込んできた。ホームのおそは屋さん『青梅想ひ出そば』に気を引かれながら改札口に向かうと、地下道の両側には、『終着駅』『鉄道員』『怪傑黒頭巾』など映画の看板がズラリ。改札



駅地下道を飾る映画の看板

口では、ギャグ漫画でおなじみの赤塚不二夫さんの『天才バガボン』のパパが逆立ちして、出迎えてくれた。

看板やお蕎麦屋さん、どれも一見古めかしい。しかし、よくよくみるとどれも新しく、昭和の趣を表現するために設置されたことがわかる。青梅駅の電車発車メロディーも『ひみつのアッコちゃん』のテーマソングだ。うん、やっぱりおもしろい街のようだ。





ジオラマ作品が並ぶ幻燈館

商店街を飾る懐かしの映画の看板  
『カサブランカ』『荒野の決闘』etc.  
さらなる期待に胸を躍らせ改札を抜け、駅前の  
道路をまっすぐ100メートルほど進むと、つき  
あたりには名画『ローマの休日』の大女優、オー  
ドリー・ヘプバーンの看板があった。  
そういえば青梅の駅に着いてから少し歩いただ  
けで、一体何枚の映画の看板を目にしただろう。

10分ほどの短い時間に、40枚以上（いやそれよりも多いかもしれない）を見  
つけることができた。『フーテンの寅』  
『用心棒』『カサブランカ』『荒野の決  
闘』…。大きさは、縦1m横2mほど  
で、いずれもかつて青梅にあった映画  
館の看板絵師だった久保板観さんが描  
いた看板だ。

そんな昭和の時代の思い出が残る商  
店街を歩いていると、だんだん昔にタ  
イムスリップしたような気持ちになっ  
てきた。

### 昭和の郷愁いっぱい3博物館 共通券購入し、昭和文化にひたる

昭和レトロの街・青梅には「昭和レ  
トロ商品博物館」「赤塚不二夫会館」「昭  
和幻燈館」の3つの博物館がある。

元は病院だったという「赤塚不二夫  
会館」は、建物自体がレトロ。館内には、  
昔ブームになった漫画『天才バカボン』  
『おそ松くん』などの絵コンテやキャ  
ラクターグッズなどが展示され、パソ  
コンで作品が読める。

「昭和レトロ商品博物館」には、昔



赤塚不二夫館（左）と昭和レトロ館

懐かしい駄菓子子のパッケージやブリキの玩具などが展示されている。また、「昭和幻燈館」には、久保さんの映画の看板のほか、ジオラマ作家の山本高樹さんが昭和の古い町並みや家屋、風景を再現した模型が飾られていた。

3館とも伝統的な木造建築の一軒家を改装した建物で歴史を感じさせる。正面にはレレレのおじさんの像や怪人二十面相の看板が飾られていたり、とてもユニークだ。3館共通券(650円)を購



### 昭和幻燈館

入すれば、どの博物館も入館することができ。昭和時代をふりかえれば、文化の大衆化により赤塚不二夫さんのギャグ漫画がブームになり、庶民の間で玩具が買えるようになったのが、ちょうど高度経済成長期(昭和30年〜40年代)の時代である。こうした時代に残された品々を見てみると、豊かさに向かって突き進んだ元氣いっぱい昭和文化を感じることができる。

### 明星大の学生も街起こしに参画 雑誌社のジオラマ撮影に出会う

とはいっても、真面目に勉強しに来たわけでもない記者は、それぞれの博物館に入り『おそらくん』の絵コンテを見てひとり笑いし、懐かしい駄菓子子を発見しては思い出にひたり、作家・永井荷風の小説「溼東綺譚」の舞台を描いたジオラマの芸術性にただただ感心したり、思い思いに昭和レトロを楽しんだ。

やはりそんな青梅の町には多くの人が魅力を感じているようだ。赤塚不二夫会館の横川秀利館長にお話をうかがうと、商店街の多くの店の店頭飾ってある看板は、明星大学青梅キャンパスの造形芸術学部の学生が作成したものだという。

商店ひとつひとつを象徴する看板は大学生が

手づくりしたもので、商店街には総計で100枚も飾られているという。青梅の街づくりに学生が主体的に取り組んでいるのだ。

また、昭和幻燈館を訪れているとき、ジオラマを大型カメラで丁寧に撮影している人たちに出会った。聞くと、雑誌『週刊鉄道模型少年時代』(講談社発行)の編集者らで、今回は特別シリーズということで昭和幻燈館にある昭和の風景を再現したジオラマの撮影に来たという。記者の一人青木悦郎さんは「ここにある模型はディテールがすごい。人物の表情も豊かで、古い時代の情緒が感じられる」と、その緻密性を評価していた。

青梅には、学生から大人までが惹きつけられるものが数多く秘められているのだ。

たぐさんの昭和レトロに出会って、昔を回顧した後、「最後に…」と立ち寄った喫茶店「となりレトロ」でウメジュース(350円)を注文し、今日の小旅は終わり。ほんのりとした甘さと酸味、そして梅の香りを堪能しながら、青梅の小旅を振り返ると懐かしさと暖かい気持ちに包まれていることに気づいたのだ。

ちょっと元気を出したいとき、感傷にひたりたとき、古き良き時代に励まされる旅にあなただけ出かけてみてはいかがだろうか。

(学生記者 山岸怜奈II総合政策学部3年)